研究ノート

翻訳落穂拾い

齋藤　　裕

キーワード
翻訳，方言，プーシキン，オネーギン，バーネット，秘密の花園

はじめに

ひょんなことから小生が翻訳の仕事に手を染めるようになってから，もうかれこれ三十年にもなります。翻訳の対象になった本は，あらかた英語で書かれた著作ですが，その内訳は，英米の小説を中心に，ファンタジー小説から歴史読み物，推理小説に至るまでさまざまな分野にわたっています。もっとも，なかにはすこし堅い魔術の歴史や現代文芸批評なぞも混じってはいますが。

作者についていえば，チャールズ・キングズレイ（Charles Kingsley『The Heroes』），短編集『Kwaidan(怪談)』で有名なラフカディオ・ハーン［Lafcadio Hearn］［小泉八雲］（「雪女」や「耳なし芳一」を知らない人はないでしょう），チャールズ・ラム［Charles Lamb］（代表作『Essays of Elia』）といった古くから自分が親しんできた文学者の名前を逸するわけにはいきません。これらはいわば《損得》抜きの翻訳です。いくらか風変わりなものでは，ゴーゴリの戯曲・小説［ロシア語］の訳なども手掛けています。[注1)]

いっぽう，この十年近く小生は二，三の大学に出講して基礎英語のクラスを担当しており，その関係から学生の英語力を養成するために，授業ではいろんな英文のテキストを学生と共に《英文講読》の一環として読むという経験を日々重ねてきました。

こちらはむろん基本英語の教科書・ドリルを，まっとうに語学教材として用いるわけですが，時には大学側の求めに応じて，副読本として自然科学の読み物やら時事論説，

注１）『ギリシア神話英雄物語』（ちくま文庫：1986）／『完訳怪談』（ちくま文庫）『天の川縁起』（集英社）（ともに1994）／『エリアのエッセイ』（平凡社ライブラリー：1994）／ゴーゴリ『検察官』（群像社：2001）いずれも船木裕の筆名で翻訳した。

現代文化論やら世界遺産など多彩なジャンルの英文も扱わなければなりません。[注2)]

そんなわけで毎週の授業では，学生ともども，こまぎれの例文から一編の小説にわたる英語の文章までを相手に格闘してきたわけです。

まあ，それやこれやで，筆者は今後もしばらくは公私の別なく，外国語の翻訳や和訳と縁の切れない生活を余儀なくされそうです。外国語を相手に格闘する日常の合間に遭遇したことや，ふと感じたことなど，学生諸君にも興味がもてそうな話題を，落ち穂拾いの流儀で綴ってみようと思い立ちました。取り上げるテーマは《英文和訳》のみでなく，《ことば》の問題から，さらに《文化的背景》などにまで及ぶことになるでしょう。できるだけ読みやすく，あまり堅苦しくならないようにするつもりです。もとより，学術的な論文としての体裁を備えたものではありません。

Ⅰ．誤植から誤訳・迷訳まで

つい先日のこと，ある大学の授業でのひとこま。[これは実話です]

「じゃあ。ここから読んでください，A君。」

「ユー・アー・ライク・ア・トゥエルブ・イアー・オールド・ボーイ。デーブ」

「ちょっと待った。もう少し大きな声で。それに，君の目はどこについているんだい。トゥエルヴでなくて，トゥエンティーだろう？　それから，デーブでなくて，デイヴ！」

「え，トゥエルブですけど」

「え，なに？［小生，手元のテキストをまじまじと見て］ほら，トゥエンティーじゃないか」

［A君のまわりの学生たち，けけんな顔付きで小生を見て］（ザワザワ，クスクス）。

［そこで，小生，いささかろうばいしつつ，ようやく事態に気が付く。が，そこで，あわてず騒がず］「うむ，妙だな。これは出版社にきちんと言っておかなければならんな」

そう，学生たちのテキストには間違いなく《twelve》と印刷してあり，他方，教師つまり小生のテキストは確かに《twenty》だったのです。

出版社に問い合わせてみて，ことの真相は，小生のテキストの《twenty》は誤植であって「すでに最新の版では《twelve》に直っております。さっそく新しいテキストをお送りします」ということで，けりがつきました。[注3)]。

このような場合，はたして誤植というべきか［現在ではたぶん写真植字つまり写植だろうから］，ミスプリントというべきか［たぶん今の若い方は植字工程なぞご存じあ

注2）現在テキストとして使っている『世界遺産』［The World Heritage］（三友社）は写真，内容，英文のどれをとっても素晴らしい。

注3）『THE STRAWBERRY SEASON AND OTHER STORIES』（成美堂）［重版1997.／初版1957.／改版．66刷2003.］

るまいが]，何度考えてもよくわからない。が，とにかく信じられないような話である。おそらく原著からテキストに組み換えて，写植するさいに，ミス・タイピング，あるいは入力間違いがあったのだろう。それにしても，初版から四十年もの間（何度も重版があったにもかかわらず）この《誤植》が生きていたとは，なんとも驚き［ミステリー］ではないか。

念のために，その部分を引用しておく。原作は《Tobacco Road》などで知られる南部ものの作家コールドウェル［ERSKINE CALDWELL（1903-87)］の小品である。この米国の作家の短編には，意外なことに，俗語［スラング］や破格の少ない文体で書かれ，内容も文学的な香りの高い作品がかなりある。英語の学習のため大学生がまず読むには，格好のテクストといえよう。[注4)]

She placed supper on the table and Dave sat down in the chair.

"You act like a twelve-year-old boy, Dave. she stated accusingly. You used to want to stay at home when I wanted to go to the dance or the pictures at the Grange hall. Now you want to go off and leave me by myself every night. What makes you so restless lately."

[A Very Late Spring]

野暮なことを言って申し訳ないが，これは《誤植》の範囲を越えているように思う。正確さを旨とすべき教科書にあっては，まず版を組むにさいして（また再版・改版についてはなおさら。なにしろ訂正すべき無二のチャンスだから）慎重の上に慎重を期してチェックしてもらいたいものだ。それほど手間，暇，金がかかるわけではあるまい。それに，このテキストを使用した大学のすべてで，このミスを見落としたとは考えられない以上，それに気づいた教師はその旨を出版社に逸速く知らせてほしかったと悔やまれる［？］。針小棒大のようだが，私の知るかぎりでも，ここ数年の間に英文テキスト［その注をふくめて］といわず中高の教科書などでも，誤植ばかりでなく，ごくささいな勘違いや重大なケアレス・ミス［うっかりした間違い］がときおり発覚して話題になったし，また，私自身もたまに見かけることがある。しかも，それらはちょっとした配慮によって防げる場合が多いようだ。なにか下請けまかせの体質やコンピュータ万能の風潮の歪み，ふとした気の緩みがあるように思えてならない。毎年のごとく起きる各種の学校入試業務のミスなどについても，同様のことが言えるだろう。いかに機械が進歩しようとも，データの入力と最後の確認はいわば手作業である。いつの時代でもきめ細かい気配りと検算を欠かすことはできない。[注5)]

注4）1987年の没後に，コールドウエルの再評価が始まっているようだ。その短編集の翻訳として『生きとし生けるものの物語』加藤修訳（新樹社：2001）をあげておく。

閑話休題，いわゆる《誤訳》について。

すでに評価の定まった，いわゆる古典的な作品は概して地味なものが多いから，現在の世相を反映して，まず売れないものと相場が決まっている。そこで，従来は利潤第一主義の出版社から出ることはまれであった。[注6)]

いっぽう，良心的とされる一流の出版社などから出される翻訳本は，その筋の権威を後ろ盾とすることが多く，社会的に高い信頼を寄せられているようだ。出版社の名前のもたらす後光である。それゆえ一般読者は何となくその《権威》を信じて，翻訳の中身も優れていると錯覚しがちである。なかには立派なものもあるが，首をかしげるものもある。当然ながら玉石混淆というべきである。十把一括りにするのは乱暴であろう。個々の仕事に対して冷静な評価が必要とされるゆえんである。

そこで，清水の舞台から飛び降りるつもりで（とかく日本では批判は誹謗中傷と取られやすいので）具体的な話に移ることにしよう。《誤訳》を相手にするからには，お上品な一般論だけでは意味がないからだ。

すでに四半世紀（つまり二十五年）も前になるが，名著『推理小説の誤訳』（サイマル出版）を著した弁護士の古賀正義は，自分の取り上げた誤訳の《訳者の実名》を敢えて出したことに触れて「私自身の気持ちのなかでも若干の抵抗はあった。誤りを誰にでもあるものであるが，とりわけわが国では，他人の非を公然と指摘することをよしとしない風潮があり，かばい合うのが醇風美俗と見なされている」と述べている。しかし，ジャーナリズムの現状を見るに，そうした陰湿な風土はいまだに変わらないどころか，ますますひどくなっているように思える。学問の世界にしても，見るからに批判精神が衰えている。物言えば唇さむしという状況がありそうだ。

さて，ロシア文学の古典に『オネーギン』［プーシキン作］というすこぶる有名な作品がある。岩波文庫にこの翻訳［池田健太郎訳］が入っている。[注7)] ここで取り上げるのは初版［昭和37］から改版［2006］までのもの。取り上げるのは，この冒頭に置かれた序詩の，そのまた最初の部分である。

もちろん原文はロシア語であるが，ここでは敢えてロシア語の該当箇所を引用しない。わざわざ引用するまでもないからだ。《誤訳》にもいろいろあるが，私の見るところ，大きく分けて《誤訳》でもたちの良いのと，悪いのがある。癌ではないが，良性と

注5）時あたかも社会保険庁の話題がまたぞろ新聞に掲載されている。いわく「年金全件紙台帳と照合」［2008.7.17］。もちろん事の発端は保険の台帳の記録をコンピュータに移し替えるさいの《入力ミス》あるいは手違いに起因するもの。そのつけは「10年かけ2000億円」だそうな。

注6）最近の『カラマーゾフの兄弟』の新訳（光文社古典文庫：亀山郁男）の異様な売れ行き（全五巻80万部）によりこうした事情は変わったかにみえるが，どんなものだろうか。主な読者層は団塊世代だという。この現象について吉本隆明に興味深い分析がある。［2008.6.7. 東京新聞夕刊］また，この訳に対してはロシア文学者たちの間から誤訳の指摘がわき起こって話題になっている。

注7）『岩波文庫』池田健太郎訳［手元にあるのは12刷．昭和48。ちなみにRKU図書館蔵書で調べてみると39刷．2003. も同じ訳文だった］

悪性というべきだろうか。

たちの悪いのは，原文を見なければ訳文が間違っていると容易にはわからぬ種類のものだ。この手はだいたい日本語がこなれいて，さも名訳らしき装いをしているから始末におえない。推理小説をはじめ《エンタメ系》の娯楽物に多く見られるが，こうした種類の誤訳は罪が深いというべきだ。ふつうの読者には貴重な原書を手にする機会はまずなく（あるいは手間や暇がなく），たといあっても原文の言語に堪能だとはかぎらないからだ。（逆に言えば，だからこそわざわざ訳書を買って読むのだともいえる）このような例については自分の体験もからめて改めて取り上げることにしよう。

このほかに一時評判になった《超訳》というのがあるが，これは読みやすさ，面白さを狙って，文章の一部や言い回しを勝手に大幅に改変してしまうもので，翻訳というよりむしろ意図的な《改訳》ないしは確信犯的な《誤訳》というべきであろう。翻訳と翻案の中間に位置づけられるのではあるまいか。

さて，もう一つの種類は，訳文を見てただちに誤訳と判明する底のものである。このケースは後者に相当する。したがって原文を引用するまでもないのである。

「おごれる社交界を楽しませようともねらわず，／友情あふれる関心にも恋いこがれず，／私は君に捧げたい，／君にふさわしい質草を，／聖なる夢想，生ける晴れやかな詩，／けだかい思い，けだかい素朴さにあふれた／うるわしい魂にこそふさわしい質草を。

（以下省略）

この部分を一読して，読者はおやと首をひねらなかったろうか。そうだとすれば，その方はまともな言語感覚をもっている。参考のために，他の訳者の訳文をあげておこう。

「傲［おご］りたかぶる社交界をたのしませようとは願わず／ひたすらに友の情けを愛でながら／ぼくはきみに捧［ささ］げたかったのだ／きみにこそふさわしい贈り物を／聖［きよ］らかな夢想［ゆめ］と／いきいきと明るい詩情と／気だかい想いと淳朴［じゅんぼく］さにあふれた／うるわしい魂にこそふさわしい贈り物を

［木村浩訳『集英社世界文学全集10』1970］

「おごれる社交界を楽しませようともねらわず，／友情あふれる関心にも恋いこがれず」の下線部が問題である。この訳文の文意はお世辞にも明瞭とはいいがたいが，それはさておき，大筋において，原意を反対に取っている，つまり，誤って理解していることは，後のつながりからも明らかである。このことは，小生の学生時代［1966-70］において，すでにわれわれの仲間内では《公然たる事実》であった。

この部分が改版［2006］では次のように直されている。

「おごれる社交界を楽しませようとは思わねど，／友情あふれる関心に恋いこがれつつ」

つまり，旧版の訳文の間違いを［ひょつとすると44年ぶりに］認めて，修正しているわけである。なにはともあれ結構なことではある。《過ちを改めるに憚ること勿れ》ということばもあるではないか。と，いいたいところだが，そうもいかない。

理由は二つある。

1．この『オネーギン』という作品は，ロシア文学の古典中の古典であることは言うまでもない。さて，ふつうの場合，序文や序詞にぶつかると，われわれはそこを読み流してしまいがちである。が，それがつまづきの石なのだ。じつは，そこに痛切な思いが潜んでいることがよくある。プーシキンのこの序詩についていえば――比較的短い文章であるが，極めて簡約な詩句のため，かなり難解な部分を含んでいる――作者が自己の作品をどのように考え，位置づけているかを知るうえで，きわめて貴重な文章といわねばならない。そんな性格をもつ序文だからこそ，とりわけ慎重に取り扱うことが要請されるのである。こうした平易な部分での誤訳は理解に苦しむところだが，ひょっと《序歌》ゆえに飛ばして訳したのかもしれない。この訳者は仕事のすこぶる敏速なことで知られていた。

2．たしかに，遅くとも訂正しないよりはましだ。しかし，該当箇所の間違いを認めながらも，一方で「おごれる社交界を楽しませようとは思わねど」とあいまいに手を入れたのがまずい。訳者はすでに故人なので，誰の手によるのか定かではないが［編集者はその経緯を明らかにすべきであろう］，ここで新たな疑問の種を持ち込んでしまった。こじらせてしまったのだ。この「思わねど」はいただけない。

こういう表現は「あたらしきサラドの色の／うれしさに／箸とりあげて見は見つれども……」というような具合に用いるものだろう。とまれ，修正処理の仕方に問題があった。ここで木村彰一訳に登場してもらうことにする。やはり念のため，引用箇所のロシア語原文を添付し，併せて，肝腎の部分にはロシア語の読みを振っておくことにしよう。

Не мысля гордый свет забавить,
Вниманье дружбы возлюбя,

「心傲れる社交界を愉しまそうとはつゆ思わず［ニェ ムイスリャ］／ただ友情の愛顧のみ希いつつ［ヴニマーニィエ ドルージブィ ヴォズリュビャー］／私はきみに捧げたかった」［『プーシキン全集2』再版1979．河出書房新社］この訳文によれば，文意は明快であり疑問の余地はない。翻訳なるものは，用いる語句の取捨選択こそ違え，原作の文章の論旨・語句の意味は明快で正確に伝えられねばならない。たんなる誤植，語句適否といった枝葉末節をあげつらうのではない。文意を反対に解し，黒を白と訳すのは誤訳以外のなにものでもない。

古典の翻訳に当たるほどの訳者や編集者には，従来の訳業だけでなく，後出の訳書にも，注意を怠らないようにしてもらいたい。

44年ぶりの改版にあたって，この部分を姑息に手直しするのでなく，後書きで間違いを認めるなり，大幅に改訳することを検討すべきではなかったろうか。

もちろん，いかなる名訳といえども所詮は人間のやること，ふとした勘違い，うっかりミスや誤植はつきものである。それでも，かりに枝葉末節であれ，間違いの指摘が

あったり，不適切な表現とわかった場合は，それらを訂正して注釈を付するのが，良心的な出版社のやりかただと思うのだが。まして，古典の訳においてをや。

ちなみに，この度の『オネーギン』の改版では，活字を大きくしたこと，訳者の小文を二編つけ加えたこと［作品の鑑賞上あまり有益とは思えないが］，それに人名の表記を一部変えたことが中心であるようだ。全体にわたって子細に比較していないが，注釈や本文にはほとんど手を入れてないのではないか。久方ぶりの改版にしては，お座なりと評されても仕方あるまい。

ここで，一つ提案をしよう。増刷や改版のさい，出版社や訳者はぜひとも内容や表現を見直してもらいたい。安易な復刻や復刊については言わずもがな，案外に，新字新かな程度の手直ししかなされないことが多いように見受ける。損得の元は十分に取れているはずだから，それ位しても罰は当たるまい。悲しいけれど，初版切れの場合［良心的書物を含めて，圧倒的多数の書籍の運命である］には，誤植，誤訳はもちろん，意に満たぬ箇所を訂正したくともできないのだから。

Ⅱ.《方言・訛り》のあつかいについて

《東北弁のシェークスピア！？》

先日の新聞で「東北の言葉でシェークスピア劇を上演する劇団」（シェークスピア・カンパニー）で主役を演じる女優が紹介されていた。[注8)]

記事によれば「シェークスピアを日本で演じるのに東北言葉と東京言葉に差はない」というのが持論で，「恋に臆病になっている人の背中押したい」そうである。

私ごとで恐縮であるが，小生の両親はともに福島県の会津の産なので，心情的にはこうした活動を応援したい気がなくもないが，ことばの問題としての《方言》の観点，あるいは外国文学の翻訳における《方言》の問題として改めて考えてみると，いろいろな疑問が浮んでくる。

この芝居の場合「昭和三十年代の東北の温泉街」を舞台とする思い切った翻案・脚本によるらしく，その点でたとえば『リア王』の新訳による正攻法の上演などと同類に扱うことはできないだろう。この劇団の活動について詳細を知らないので，立ち入った論議を進めることは控える。ここでは，なるたけ一般論に引き付けて，翻訳における《方言》の問題をめぐって，覚書ふうに述べてみたい。

1.《方言》の問題は，《ことば》について考えるとき，どうしても避けて通ることのできない課題のひとつである。図書館の棚には『○○方言辞典』や『方言地域図』の類はやたらと見かけるが，その割りに方言の性格や方言の抱える問題に関して，これまで

注8）「東京新聞」2008.7.12. 朝刊「この人」（星奈美）

十分に掘り下げられてきたとは，必ずしも言えないようだ。[注9)]

2.《東北言葉》《東京言葉》という《ことば》を用いる意識の裏には，《中央》と《地方》の問題，あるいは，それにかかわる地方差別，言語差別への批判が横たわっている。「シェークスピアを日本で演じるのに東北言葉と東京言葉に差はない」という発言にもそれがうかがえる。えてして《標準語》は美しくて良いことば，《方言》は汚くて悪いことばという心理や思い込みに陥りやすいが，国家による言語政策の一環として，戦前に強力に展開された沖縄方言や東北弁の矯正運動のような轍を踏んではなるまい。現代日本社会に見られる各種《方言》の自由な跳梁は，戦前に虐待された過去への復讐であるようにさえ思えてくる。言うまでもなく《方言》は，それぞれの地方の人々の生活に根ざした文化遺産である。ただ，人は《文化遺産》のみで生きることはできない。

3．一方《標準語》と《共通語》の区別は別の基準による使い分けである。[注10)]

私は英文で書かれた『エリアのエッセイ』を日本語の文章に翻訳した経験があるが，あくまで《共通語》としての《日本語》を念頭に置いて訳している。これは明治時代から国民的規模で形成されてきた，いわば《永遠に未完成》のことばであって，現在の《東京言葉》もしくは《東京弁》を標準ないし理想にしたわけではない。《標準語》の歴史にまつわる光と影をはっきり見据えることが，今こそ大切なのではあるまいか。[注11)]

津々浦々で生活している誰もが，自分の思いや考えを自由に述べ合える，生き生きした《共通語》を作りだし，練り上げて行くことはできないものか。言うは易く，行うは難しと言わざるをえない。そのための具体的な工夫や提案に乏しいのが実情なようだ。《共通語》というと，とかく話し言葉（音声言語）を中心に論じられやすいが，むしろ書き言葉（文字言語）としての《共通語》の可能性を模索することが大切なのではないか。

4．たとえばシェークスピアの『ハムレット』（英語）を日本の各地方の言葉（日本語），つまり《津軽弁》《岡山弁》《東京弁》《名古屋弁》《大阪弁》《鹿児島弁》等々にそれぞれに翻訳して，お互いに他の地方で公演するとしたらどうなるか。それこそ百花繚乱で面白いことは相違なかろうが，現在においても《津軽人》の観客が《鹿児島弁》の芝居をしっくり理解することができるだろうか。はたして原作の意図や原文の雰囲気が十分に伝わるものだろうか。ここには翻訳をめぐって表現と理解の問題，思想の伝達の

注9）時枝誠記『国語学原論（続編）』［昭和30年］4章3節「標準語と方言」に，従来の国語学の方言研究の経緯が簡単に触れられ，《主体的立場》からの批判的説明もある。また最近のものでは『方言論』（柴田武／平凡社／1988），『ことばと国家』（田中克彦／岩波新書／1981）などがある。

注10）『岩波国語辞典』（4版）によれば，《標準語》は「国で規範的・理想的なものとして認められている，共通の言語」／《共通語》は「全国（または広い地域）のどこでも通ずる言語。標準語とはかぎらない」とある。

注11）上述の時枝の論議の進め方には《標準語》と《共通語》の正しい区別がなされていないことでわかるように，明治以来の日本語の強引な《標準語》［中央］政策が，とりもなおさず《方言》［地方］の理不尽な否定であったことの認識がほとんどない。

課題など考えるべきことが山積している。

5．現代の日本の言語状況は，テレビ・ラジオのマスコミ，ジャーナリズム，映画・マンガなどの媒体，広告宣伝の圧倒的な影響を抜きには考えられない。むしろそれらにほぼ決定的に左右されているいうのが実際ではなかろうか。《いつの時代，どんな社会でもことばは変わってきている》というもっともらしい真理に落とし穴はないのだろうか。二十世紀末以来，とりわけ悲惨を極めた阪神大震災以降の人間集団の大移動とことばの混乱のなかで，日本の言語状況は理想の《共通語の貧困》と現実の《方言のごった煮》との間にいよいよ引き裂かれ，ますます混迷を深めているように見える。[注12)]

ここでしばらく，外国の状況に目を向けることにしよう。世界各国の言語にもさまざまなレベルの《方言》が存在するのはむろんのことだ。英語の方言について，最近たまたま読んだ小説『秘密の花園』[《The Secret Garden》]が，格好の実例を提供していると思われるので，取り上げてみよう。

今日，著者バーネットの名前は，少年小説の愛読者を別にすれば，必ずしも一般によく知られてはいないようだから[注13)] ざっと紹介しておけば

[Burnet, Frances (Eliza) Hodgeson] (1849-1924)

米国の女性小説家。イングランドのマンチェスター生まれ，1865年にアメリカに移住。晩年は英国に戻った。おもに子供向けの文学作品で成功した。かなり多作であるが，その中に出世作『小公子 [Little Lord Fauntleroy] (1886)』『セイラ・クルー [Sara Crewe] (1888)』そしてこの『The Secret Garden [1911]』が含まれている。文学史に残るようないわゆる大作家ではない。

バーネットが従来日本で知られてきたのは，もっぱら『小公子』と『秘密の花園』の作者としてである。あるいは『小公女 [A Little Princess]』を加えてもいいかもしれない。『小公子』はすでに明治25年 [1902]，作者の存命中に翻訳されている [女学雑誌社]。巌本善治の妻若松賤子の手になり，名訳の誉れが高い。この訳文は二葉亭四迷の小説『浮雲』とならんで，言文一致体の文体として文学史上特筆される存在である。若松訳の『小公子』はつとに [昭和２年] 岩波文庫に入っており，私は学生時代から繰り返し読んだものだ。黒岩涙香訳『十五少年』[ジュール・ヴェルヌ] と並んで思い出深い作品である。私のバーネットとの縁はそこで途切れてしまう。ラジオの読書案内 [作家の小川洋子] でそれが復活したのは，つい最近，三十年ぶりのことである。

注12) 前世紀末よりインターネットやケイタイが出現し，電子技術が普及したことによって，現代の世界は新たに未知の深刻な問題をかかえることになった。これは言語にとどまらず，認識，思考を含めて文化全般にわたる変容をうながしている。マクルーハン『グーテンベルクの銀河系』，スヴェン・バーカーツ『グーテンベルクへの挽歌』など参照のこと。

注13) 現在の日本では，翻訳児童文学の名作としてはむしろ『若草物語』や『赤毛のアン』などのほうがずっと有名であり，多く読まれているのではあるまいか。もっか大はやりの『ハリー・ポッター』については言うまでもない。

さて，この『秘密の花園』は，作者が亡くなった時期には，どうも世評が低かったようだが，じりじり児童文学作家たちの間で注目を集めるに至り，今やバーネットの最高傑作というのが児童文学史でのほぼ通説になっているらしい。[注14)]

近年出版された新訳の解説［松本朗］では「『秘密の花園』における子供観や自然観は「無垢」と「経験」，「自然」と「文明」……などの相反する要素がせめぎ合う，複雑な様相を呈している。（中略）ここにあらわれるこどもや自然の描写は，［当時の］イギリス社会に広まっていた思想を含みながらも，それだけにとどまらない破壊的な要素をもち，それが物語に陰翳と活力を与えている」と述べている。この作品を「あらゆる時代に通じる真の古典としての地位」に押し上げんばかりの称賛ぶりである。［『秘密の花園』光文社古典新訳文庫／2007年］

この評価は余りにほめ過ぎのきらいがあるが，まだの方にはこの物語りをぜひ一読することをお勧めしたい。もとより子供の目から世界を描いた少女少年向けの作品には違いないが，大人の読書対象としても十分読むに堪える魅力をそなえている。

こんな《児童文学》は，そうざらにあるものではない。もっとも，後半部分は冗漫に流れて信仰臭くなるのにはいささか閉口するが，それも玉の傷というもの。紛うかたなく児童文学の傑作の香りがする。百年前の作品とは思えぬ内容の斬新さがある。《大人にも子供にも面白くて為になる》こと請け合いである。

両親の愛情を知らずに育てられた，インド生まれのお嬢様が，コレラの大流行のために孤児の境涯に突き落とされる。遥々イングランドは，ヨークシャーの大地主の伯父のもとに引き取られ，そのお屋敷で世話を受けて，新しい生活を送ることになる。この可愛げのないメアリの《つむじ曲がり》［quite contrary］ぶりが，はなから読者を魅了する。そして，病弱の少年である従兄弟コリンとの意外な出会い，《秘密の花園》の発見へと物語りは繰り広げられる。かくて「傷ついた心が自然の中で癒され生気を取り戻して行く」（「訳者あとがき」）わけである。

この小説の特色は，まずもって，とびきり平明な英語による文体の軽快な，自然な速度感にあるといえよう。訳者が「意外なほどそっけない文章」と評した気持ちは分からないでもない。とにかく重々しさとや気取りとは無縁である。少女小説にありがちな，べたべたした感傷性のかけらもない。

これまでの二，三の旧訳と比べて，土屋京子による新訳は「大人が読む作品として手加減なしの文章で翻訳」した点になにより新味があり，好感がもてる。また，後で触れるように，《ヨークシャー》訛りへの目配りも効いている。なかなかいい翻訳だと思う。[注15)]

そのお屋敷に着いてから，主人公のメアリが女中頭のメドロック夫人をはじめとして

注14）アメリカでも再評価の兆しがみられる。フランシス・F・コッポラ製作総指揮のもとで映画化もなされている［1993年．アグニシュカ・ホランド監督］。この映画は大幅な脚色にもとづくものだが，前半部分の動植物を含めた自然描写は物語り映画にしてはなかなか見ごたえがある。

次々と現地の人々に出会うが，この人たちの質朴な人柄や自然風景の表現がじつに爽やかで快い。こうした脇役の人物や美しい自然描写が，この小説の主要な筋立てを縁の下の力持ちのように支えている。

次の文は土砂降りの雨の翌朝，起床したメアリの目に飛び込んできたムーアの情景。

The rain-storm had ended and the grey mist and clouds had been swept away in the night by the wind. The wind itself had ceased and a brillant, deep blue sky arched high over the moorland. Never, never had Mary dreamed of a sky so blue. In India skies were hot and blazing; this was of a deep, cool blue, which almost seemed to sparkle like the waters of some lovely, bottomless lake, and here and there, high, high in the arched blueness, floated small clouds of snowwhite fleece. The far reaching world of the moor itself looked softly blue instead of gloomy purple black or awful dreary grey. [Ⅶ THE KEY OF THE GARDENの冒頭の自然描写]

なかでも，この《つむじ曲がり》のメアリが，小間使いのマーサや弟のディコン，さらに庭師のベン・ウェザースタッフなどと交わす会話の生きのよさ，面白さは，なんとも格別で，歯に着せぬやりとりは痛快でさえある。

「『秘密の花園』を翻訳するうえでもうひとつの大きな課題は，ヨークシャー訛りを日本語でどう表現するか，ということだった。（中略）特定の方言は使わないことにしよう——今回の翻訳はそういう大前提から出発した，しかしそうはいっても，この作品においてヨークシャー訛りが重要な意味をもつ以上，登場人物たちの会話をすべて標準語で訳すわけにはいかない。」（「訳者あとがき」）［アンダーラインは引用者］

こうした案内に導かれ，筆者はこの小説の原著に初めて触れてみて，登場人物の溌剌とした振る舞いや人物像，田舎の自然にますます強烈な印象を受けた。そのさい《ヨークシャー》の自然の風景（ムーア）[注16] にもまして，その質朴な土地柄や《方言》の持

注15）新訳で気になった点を二つだけ指摘しておく。ひとつは《ガヴァネス》を家庭教師とだけ訳しているのはあまりに不親切ではないか。これこそ文化史的な訳注がほしい。後述の『ハリソン自伝』にもこの《ガヴァネス》についての記述が出てくる。ふたつ目は《to close（shut）the door behind oneself》という慣用表現を《ドアを後ろ手で閉める》と直訳するのは，よく見かける《誤訳》である。こんなことできるわけがありません。

注16）［moor］については，『ロングマン・現代英英辞典』［3訂版．1995］に目配りの効いた説明があるので，引用しておこう。美しい紫色の花を咲かせるヒースの点在するムーアの地は，痩せていて農耕に不向きな土地である。
「usually moors［pl］. a wild open area of high land covered with rough grass or low bushes and HEATHER, that is not farmed because the soil is not good enough.」また文学史的には，かのブロンテ姉妹の生まれ育ったのもこの《ヨークシャー》であり，エミリの傑作『嵐が丘』［Wuthering Heights: 1842］の魅力はもちろんこの地方の風土，とくに《ムーア》という舞台と切っても切り離せない。ちなみに《wuthering》は土地のことばで《吹きすさぶ》という意味である。

ち味といった要素が，この小説の舞台を盛り上げ，読む者に感銘を呼び起こしていることも痛感した。そこでしばらく，この物語りの背景となっている《ヨークシャー》に注意を向けてみよう。そもそも《ヨークシャー》とはいかなる風土なのだろうか。

一般に愛玩犬の「ヨークシャー・テリア」や料理の「ヨークシャー・プディン」などでおなじみの《ヨークシャー》[Yorkshire] は，かつてイングランド北東部を占める最大の旧州であった。州都である古都ヨークは，中世のバラ戦争 [1455-85] の一方の貴族ヨーク家 [白ばら] で名高いが，壮麗な大聖堂 [cathedral] の存在でも知られる。

英国国教会 [Anglican church] の全教区 [parish] は，ヨークとカンタベリーという二つの管区 [province] によって分かたれ，このヨークの大主教 [archbishop] とカンタベリー [イングランドのケント州．チョーサーの『カンタベリー物語』はカンタベリー大聖堂への参詣を背景としている] の大主教がそれぞれを統轄している。ヨークは文化的，歴史的由緒のある地方都市であるといえよう。[注17)]

ところが，面白いことにすでにかなり古く [遅くとも16世紀ごろ] から，この地方は隣接するリンカンシャーと共に，イングランド南部（むろん中心は首都ロンドン）の立場から，さんざんに笑いの的にされてきたという事情がある。[注18)]

ヴィクトリア時代には 'From Hull, Hell, and Hallifax, good Lord deliver us !' [神よ，ハルとヘルとハリファックスから我らを救いたまへ] という文句が，都人士の口の端に上っていたと伝えられる。このHullとHallifaxはいずれもヨークシャーの都市名 [前者は有数の海港，工業都市] であり，発音の似た Hell（地獄）にかこつけて《こけ》にされているわけである。[注16)]

まったくの偶然ながら，かつて小生の翻訳した『ギリシアの神々』[MYTHOLOGY: 1924／ちくま学芸文庫] の著者 Jane Ellen Harrison [1850-1928] が，この地方の町 [Cottingham] の出身であるので，しばらくハリソンに視点をあわせて，そこから《ヨークシャー》の姿形にスポットを当ててみよう。『秘密の花園』の作品を理解するうえで参考になるだろう。

彼女は優れたギリシア学者であったが，その『自伝』[REMINISCENCES OF A

注17) ごく大ざっぱな類推をすれば，古都ヨークの存在は，日本における関東地方の江戸＝東京に対して，古い伝統を有する東北地方の仙台や会津といったところだろうか。

注18) また《put Yorkshire on a person》：[（人を）だます．一杯食わす．出し抜く] という言い回しがあり，これは《ヨークシャーの人はずるくて抜け目がないとの評判から》だという [『研究社大英和辞典』（4版）] このような，ある《地方》[おもに田舎・未開] に対するお笑いや軽侮は，ある《階級や階層》[特に下層民の貧困や無知] に対するお笑いや軽侮とならんで，どこの国でも見受けられるお決まりの興味深いテーマであるが，一見ばかばかしく単純なように見えて，その背景には社会的，文化的，政治的な要素などがからみあつていて，その解明はそれほど簡単ではない。また，こうした現象はむろん《方言》ないしはことばの問題そのものと深いかかわりがある。

注19) 『ハリソン自伝』（ヴィクトリア朝のある女性学者の一生）[流通経済大学論集Vol.42. No2-3. 2007.10/2008.1（通巻157-8）]（齋藤裕訳）

STUDENT'S LIFE]注19) の中で，みずからを《古いリベラリスト》と呼び，《大英帝国》なるものは思想上，退屈で有害であるばかりか，戦争の種を含んでいるから，大嫌いだと述べている。

また，自分のヨークシャー気質［かたぎ］にもふれて「考えとしては進歩的で，あらゆる現代の動向から遅れまい」としているが，そんな裏側に「無分別なまでに保守的で，偏見に凝り固まり，天然の上に根差した」(rigidly, irrationaly conservative, fibrous with prejudice, deep-rooted in her native soil) 気性がでんと控えていると分析している。ロンドンなどのイングランド南部の人間にいわせれば「わたしたちヨークシャー人は排他的で，態度は荒々しく，精神は粗野で，同情心に欠ける」(We Yorkshire people are exclusive, gruff in manners, harsh and unsympathetic in soul) ところがあるそうな。たしかに「すこぶる旧式で，田舎風なところ」(singularly old fashioned and provincial) があるのは認めますが，一方で「わたしたちが何よりも嫌いな不道徳は，気取りなのです」(The vice we hate above all others is pretentiousness) と反論している。とどのつまり，それらの特徴の一切合財をひっくるめて，自分は《わが故郷》ヨークシャーの女であることに強い誇りを抱いていると彼女は告白している。

このような叙述のうちに《ヨークシャー》の風土や気質の特色や魅力がおのずと明らかになってくるように思う。田舎風の風俗，荒々しいことば，旧式を尊ぶ質実な生き方，虚飾を嫌う頑固な性格という点を，大ざっぱに《ヨークシャー》魂の特徴とみなしてもよさそうだ。「思ったことを遠慮なく口に出すのがヨークシャーの流儀」とバーネットも物語の中で書いている。

これらの背後には，イングランド南部［首都圏，イングランドの中心といってよい］と比べると，ずっと厳しく寒い気候や，荒涼たるムーア［またはヒース］の原野，恵まれぬ自然環境の下で，農耕牧畜［ことに羊や豚の飼育やちが目立つ］，毛織物業などを営んできた地方の質朴な生活の積み重ねを指摘することができよう。

イングランドにおけるヨークシャー像の形成をめぐっては，地元からの《誇り》の視線と，ロンドン側からの《軽侮》の視線とを合わせ鏡にしてみて，はじめてその立体的な姿形が捕らえられるのではあるまいか。

ハリソンとバーネットの生年に注目すると，ほとんど同じころ19世紀半ば，すなわちヴィクトリア時代［1837-1901］の始まりの時期であり，この時代の英国は政治的には大英帝国の植民地支配，経済的には近代資本主義の勃興，文化的には虚飾と男女差別のヴィクトリア文化の開花期に当たっているいることは見逃せない点である。

ハリソンの著作には，当時の家庭での家父長支配への批判的なことばが見受けられるし，宗教，教育，社会の方面での，事大主義的，偽善的風潮についても，さりげなく，しかし，かなり辛辣に描写されている。注20)

こうしてみると，少女マリアがコレラ禍のインド［英国植民地］から脱出して，イン

グランドの田舎，ヨークシャーへとたどりつき，そのムーアの自然と質訥な人々の間で，本来の自己を見いだして行く，その展開の道行きも，おのずと象徴的意味合いを含んでいることがわかるだろう。

バーネットの心情には，ヴィクトリア社会に対する反発，批判があったことは疑いようもない。が，この優れた児童文学者は，その時代を正面から暴露，批判するような社会的な小説を書くという正攻法を取らず，速度のある，即物的な文体を用いて，子供の視点から社会の底辺，地方の世界に生きる庶民たちの質朴な姿形を活写し，ヴィクトリア社会の相貌を浮彫りにする迂回法を選んだのである。かくて，この物語は児童文学でありながら，いくらか劇画的に，また戯画的にではあるが，ヴィクトリア社会の単なる《陰画》以上のものを描き出すことに成功したといえるのではないか。

さて，話を方言そのものの問題に戻すことにしよう。

それでは，いよいよ『秘密の花園』で用いられている《ヨークシャー》方言なるものが，いったいどんなものか，ざっと見て行くことにしよう。[注21)]

まずは論より証拠，どんな英語なのかを示そう。

メアリがお屋敷で召使のマーサと初めて会ったときのひとこま。

'Who is going to dress me ?' demanded Mary. / Martha sat up on her heels again and started. She spoke in broad Yorkshire［むきだしのヨークシャー訛りで］in her amazement. 'Canna' tha' dress thysen ?' she said. 'What do you mean ? I don't understand your language.' I mean can't you put on your own clothes ?

お嬢様メアリには，マーサのヨークシャー訛りの英語が理解できないことがわかる。

女中頭のメドロックさんに禁じられているのに，田舎育ちのこの小間使いはときおりヨークシャー弁を口にしてしまう。次ぎにあげるのは数日後の会話。《植民地＝インド育ち》のメアリがいわゆる標準の英語を話すのが，なんとも印象的である。また，このやりとりから方言をめぐるメアリとマーサの言語感覚や言語事情がうかがえて興味深い。

'Eh ! no !'［とんでもない］said Martha, sitting up on her heels among her blacklead

注20）ヴィクトリア時代の偉人たちの伝記として，リットン・ストレイチー『ナイティンゲール伝』（橋口稔訳／岩波文庫）をあげておく。

注21）当然ながら，言語学の観点からは，そもそもこれらの会話の《ヨークソシャー》方言が，資料の正確さや表現方法について，どの程度信頼できるものなのか，いろいろと疑問が出てくるだろう。が，ここではそれには立ち入らない。バーネットはもともとイングランド生まれとはいえ，ヨークシャーの地元の人間ではないし，そこに長く住んでいたわけでもない。《ヨークシャー》訛りといっても，あくまで，この小説の会話として効果的に用いられているに過ぎない。しかしながら「ひとくちにヨークシャー訛りといっても，バーネットは人物ごとに音韻，文法，語彙などの「訛り度」をさまざまな強さで配合してしゃべらせている」（土屋京子）ことからしても，小説家バーネットはかなりすぐれた方言感覚をもっていたことがうかがえる。

brushes. 'Nowt o' th' soart !'

'What does that mean ?' asked Mary seriously. In India the native spoke different dialects which only a few people understood, so she was not surprised when Martha used words she didn't know. [インドでは現地人は数人にしかわからないいろんな方言を話していたので，メアリはマーサが自分にわからないことばを使っても驚かなかった]

Martha laughed as she had done the first morning. 'There now [またやった],' she said. 'I've talked broad Yorkshire again like Mrs Medlock said I musn't. "Nowt o' th' soart" means "nothin' of the sort [そんなことないわ]",' slowly and carefully, 'but it takes so long to say it. [それじゃあ長くてまだるっこい]'

[tha '=thou=you]

小説の中で，バーネットはこの召使のヨークシャー訛りにふれて，次のように述べている。「マーサの奇妙なヨークシャーなまり と純朴な態度には，どこかやさしくて温かい雰囲気があり，メアリの気分をなごませた。」(土屋京子訳)

次に，「一筋縄ではいかない偏屈者の」庭師ベン・ウェザースタッフの会話から引用してみよう。この庭師のヨークシャー弁は「音韻的にもっとも変則的で，文法にも誤りが多く，語彙もいちばん古くさい。つまり，無学で年寄りの男性がしゃべるヨークシャー弁」(土屋京子) である。

'Tha' and me [=You and I] are a good bit alike.'

'Thinks I [= I think] to myself I never set eyes on an uglier, sour-face 'un [=one /ヤツ。ガキ].

'Well, I'm danged [=damned] ! Tha' does know how to get at a chap tha' does ! Tha's [=Thou has ? ほんらいは art] fair [=fairly] unearthly, tha's so knowing'

(いやはや，こんちくしょう！ おめえってやろうは，ほんとに人をたらしこむのがうまいわ，いや，まったく！ この世のもんじゃねえみたいなやつだな。おめえはなんでもこころえてやがる)

おしまいに，この小説で出てくるヨークシャー訛りについて，気のつくままに少しまとめておこう。

1) 単語 [言葉遣い]

《wick》: 共通語の《lively》《alive》に相当。《元気な，生き生きした》の意味。

'Its as wick as you or me,' he said; and Mary remembered that Martha had told that 'wick' meant 'alive' [元気な] or 'lively' [生き生きした].

《thou》: 共通語の《you》に相当。《本来の第二人称単数主格》であるが，ヨークシャー訛りで頻繁に用いられている。この対格が《thee》である。現在では「神に祈る

時，Quaker教徒間で，また方言及び古風な文や詩歌などに用いられるだけで一般にはすべて《you》を用いる」（研究社『簡約英和辞典』）とされている。なお本来の《第二人称複数主格》は《jee》であり，《you》はその対格・与格に当たるものであった。

Tha' [= Thou] knows us won't trouble thee.

（おまえ［＝こまどり］おれらが邪魔したりしないって知つとるもんな）［thou knowest が本来の形］

《thou》はシェイクスピアの戯曲においてもまだよく使われている。

No, Regan, thou shall never have my curse. [King Lear: II.iv.172]

（いや，リーガン。このわしは決しておまえを呪ったりはせぬぞ）

《nowt》[=naught=nothing]

If tha' likes. But there's nowt to see.

2）発音

A body 'as[=has] to move gentle. / it startles 'em[them]

このように《has》の《h》がぬけたり，《them》の《th》が発音されなかったりするのはごくふつうである。こういう現象は口語体でよく見受けられ，ことさらヨークシャー訛りということもない。ほかにも《an'》[=and]，《for' ard》[=forward].《p' raps》[=perhaps] などなど多数の例がある。

Tha'[=Thou] knew how to build tha'[=thy] nest before tha' [=thou] came out o' [=of] th'[=the] egg.

Thy half o'[=of] th'[the] kingdom hast thou not forgot / wherein I thee endowed. [King Lear: II.iv.168-9]

（この王国の半分はわしがおまえに授けたのだということをおまえは忘れてはおらぬ）

'We munnot [=musn't=must not] stir,' he whispered in broad Yokshire.

この場合は《must not》が《munnot》にまで崩れている。

3）文法の表現（破格）

There's lots of flowers in summer-tome, but there's nothin' bloomin' now.

もちろん《There are》が標準であるが，現在でもよくぶつかる表現ではある。

Us is [=We are] near bein' wild things ourselves.

（おれらだって野生の生き物の仲間みてえなもんだからな）

これはすさまじい破格だ。本来《一人称複数目的格》の《us》が，堂々と主格［つまり we］として用いられている。be動詞も変則的に《is》で受けている。もうひとつ引

用すれば

Us'll have him out here some time for sure.

（いつかあの子をきっとここまで連れてきてやろう）

これらの英文を読んでいて，わたしはかつて英語史の本で出くわしたある説明を思い出した。これは学生諸君にもぜひ知っておいてもらいたいことだ。

もし《Him killed the bear.》という英語を出して訳させたら，まともな日本人なら「彼を熊が殺した」と訳すであろう。しかし現代では，こういう文章は「彼が熊を殺した」と訳してよいのである。「つまり，現代英語では――一般に口語的表現では《格変化》と《位置》が争ったら，《位置》が勝つというのが常道になっているのである。」

（渡部　昇一『英語の歴史』／大修館書店／1983／113ページ）

［翻訳落穂拾いⅠ　了］